

## 第二章 比企の里一比企尼

春になると、比企の有力豪族、比企能員から養母の比企尼が里帰りしているので、郷子に、来て欲しい旨の連絡があった。

郷子が、綾姫も同行してもよいかと問い合わせると、郷子と無口な弟の四郎重方と二人で泊まりの用意をして来いとのことであった。

河越から比企までは、馬で行けば少し遠乗りした程の距離で、長話をしても十分に日帰りできるはずである。それを、泊まりの用意をして来いとは、なにか深い話でもあるのだろうか。郷子にとっては初めての経験だった。

郷子は、いつもの朝駆けをするのと同じ時刻に、馬房から三日月を引き出すと、準備を終えてすでに待機していた重方と若い郎党を一人を連れて河越館を出発した。麻の内に着に萌黄の単衣を重ね、それに白い切袴といういつもの軽装である。正装と泊まりのための着替えは、郎党に持たせている。

入間川の兩岸は、タンポポが一面に生えている。

向こう岸は菜の花畑が広がっていて見渡す限り黄色に覆われている。

川の上流には、今日も山頂に白雪を残した富士山が青い空を背景にくっきりと見える。

農民達は、朝早くから入間川の水を引いて、水田の準備に忙しそうに働いている。この辺りは、土地が肥沃で、水も豊かであるため稲作、麦作、畑作など穀物や野菜が豊富にとれる。西国地方は少雨のために凶作で、京は飢饉でひどい惨状だというのが、こちらでは幸いそのようなことはない。河越重頼が、豪族の基盤は農業だということで、専業農家のほか、一部の精鋭を除く一般の武士の多くを兼業農家として、農業に従事させていることで、作地面積は広く手入れも行き届いているからである。しかし、専業農家といっても、農民兵として徴用されることがあるから、主たる仕事が武士か農家かという程度の違いにすぎない。

北西に向かって、すこし駆けていくと道は平地から徐々に小高い丘を上がって行く。狭い山道を上に昇るにつれ緑に覆われた木々の間に三分咲きの桜が混然と融和した華やかな景色が眼下に広がってくる。

比企館は、林間道を抜けた丘の上に立っているが、その辺りまで来ると館全体が幾重にもおびただしい紅い梅の花に囲まれているのが判る。

梅の実は、そのまま食用にしたり、携帯食のための梅干にしたり、酒につけて梅酒を作ったりして用途が広いうえ、胃の薬にもなるので、本格的に栽培しているのだ。

郷子一同が、比企の館に着くと、郷子だけが別室に案内された。

郷子は、そこで正装の唐衣に着替えて待っていると、比企尼の侍女が入っ

てきて、こちらにどうぞと案内する。

比企氏は、実質的な当主である比企尼が郷子の祖母である。棟梁の比企能員は、比企尼の養子で、郷子の叔父にあたる。そんな関係で、比企館は子供の頃に母と一緒に何度か訪れたことがあり、その勝手は良く知っている。

親族だから別に遠慮する必要はないが、今日はすこし緊張せざるを得ない。

郷子が、一室に案内されて正座して待っていると、比企尼と中年の落ち着いた学者風の武士が現れて上座に座る。

「お祖母さまのお招きにより、本日お伺いいたしました」

郷子は、挨拶を申し述べながら、丁寧にお辞儀をした。

比企尼は、もうかなりの高齢であるが、背筋が伸び、立ち居振る舞い全てが凛としている。しかし、近寄りがたいわけではなく、穏やかな雰囲気を持っていて、情が厚く相手に威圧感を与えることはない。だからといって、無意味な甘えは許されないし、軽口を話したら窘められそうな、ある種の品格のような雰囲気をたたえている。

「こちらは、長らく都に住んでいたもので、初めて会うことになると思うが、貴女もよく知っている三善康信殿です」

比企尼が隣にいる中年の武士を親しげに紹介した。

中年の武士は、郷子に対して、わずかに頭を下げて頷く。

郷子は、年配の武士に失礼にならぬように丁寧な礼を返すが、（貴女もよく知っている）と言われてもこの人物が誰なのか全く見当もつかない。

「では、また明日」

予め打ち合わせているのか中年の武士は比企尼に簡単な挨拶をすると、立ち上がって部屋から静かに退出した。

「この前にあったのは何時だったか、たしか、貴女の母親に頼家さまの乳母になることを申した際だから二年も前のことになるろうか。その頃は、色の黒い活発な男の子のような女子だと面白く見ていたが・・・」

比企尼は、そう言って、郷子を穏やかな目で見ていたが

「あまり変わってはいないようね」と率直な感想を述べた。

「室にこもり読み書き和歌などの学問や箏などの楽曲を覚えるより、外で武芸の真似事や乗馬などで体を動かすほうが好きなものですから、どうしても日に焼けてしまいます」

郷子も、率直に答える。

「やはり、武士の娘じゃのう。ところで、貴女は今幾つになる」

「今年の正月で十七歳になりました」

「普通ならもう嫁にいい年頃であることは、判っておろう」

「妹からは、行かず後家と馬鹿にされております」

「ほほほ、それは言いすぎじゃの」

郷子は、うすうすは感じていたが、これは、嫁に行く話なのではないかと胸の鼓動が早まり、顔が緊張して赤くなるのを抑え切れなかった。

比企尼は、それを見越して、すこし話しを変えた。

「私が頼朝さまの乳母をしていたことは、貴女の母でもある次女の河越御前からいくらかは聞いておろうが、ここで、お主に詳しく話しておきたいと思う。それは、きっと後で役に立つと思うからじゃ」

比企尼は、少しの間庭に咲いている梅の花の方を遠い目で見ているが、郷子に目を戻すと次のように話し出した。

「私は、ここの小豪族の娘として生まれたが、お主と同じ十七の時に、ここ武蔵国比企郡の代官として赴任してきた、藤原秀郷の流れを汲む下級貴族である掃部允に見初められて結婚した。この辺りにはいない貴族の血筋で物腰が洗練されており、その上なかなかの男前だったから、嫁に欲しいと申し込まれた時には、真に嬉しかった。ただ、自分のような無骨な武士の娘でよいのだろうかとか不安になったことを覚えている。しかし、それは杞憂であった。結婚などというものは、結婚する前はあれこれ心配するものだが、夫婦になって同じ褥で寝て子供が出来ればどうにかなるものよ」

比企尼は、口元に笑みを浮かると自分で納得するように頷いた。

郷子は、顔が赤らむのを感じて、それが恥ずかしかった。

「掃部允は、鎌倉にいた源義朝さまに仕えていたから、義朝さまが上洛されて、源氏の棟梁として京に屋敷を構えられた際に、夫婦揃って奉公することにした。その時には、長女と次女はもう生まれていましたよ。

三女を生した頃に、義朝さまと熱田大宮司、藤原季範の娘の敦子さまとの間に頼朝さまがお生まれになった。それで、わたしが義朝さまに呼ばれてご挨拶しますと『頼朝の乳母を捜しているのだが、聞くところによると、あなたは、情が厚く子育ても上手だということで、侍女たちも信服しているそうだ。もし、貴女が頼朝の乳母になったら、頼朝をどのように育ててくれるかな』とお尋ねになりました。そこで私は『貴族としての教養を身につけ官として立身出世をはかるよりも、むしろ、武家の棟梁として、将来どのような苦難が待ち受けても、それを跳ね返すだけの肝玉が太い人になれるようにお育てしたいと存じます。また、一旦乳母を拝命いたしましたなら、一生涯お側に仕えて、支える所存でございます』とお答えすると、にっこり笑われて、

『そちに乳母になってもらうことに決めた。頼朝の生涯を託すからよろしく頼む』とその場で決断されたのじゃ。後で聞くと、乳母候補には、貴族の娘や才女といわれる女房なども多々いたそうだが、最後に面接した私に決まっ

たそうじゃ」

比企尼は、その時の感激を思い出したのか一息入れた。

郷子は、一お祖母さまは、その時、その後の頼朝さまの苦難の人生を予測されていたのだろうかーと思った。

「産着に包まれた頼朝さまを始めてみた時、義朝さまのいかつい豪傑顔とは違って、母の敦子さまに似ておられたのでしょうか、それは品のいい賢そうな顔立ちをしていて、ああこの子は将来天下を取るような立派な武士になるに違いないと私はその時確信しましたよ。私の子供は三人とも姫だったから、この賢そうな若様にお乳を上げていると天にも昇るような幸せを感じたものです。

貴人の家では、母親が子供を育てるのではなく、乳母が朝起きてから夜眠るまで一日中付き添って、授乳からおむつの交換、衣服の世話から湯浴み、教育から躾まで全ての世話をしますから、それはわが子以上に情が移ってしまうのもごく自然の道理。 出産後遠からず、実母の敦子さまが亡くなられたこともあって、頼朝さまは、すっかり私に懐いて、小さいうちは私の姿が見えないと泣き出す始末でした。大きくなるに従って、学者を呼んで、読み書き和歌などの学問や、軍師から兵学などを教えていただきましたが、その理解の早さに学者も軍師も舌を巻いておりました。それから、家人の中からひとかどの武芸者を選んで、弓矢、刀、乗馬の稽古をしてもらいました。十二歳で元服した時には、その若さで皇后宮権少進という官職に付かれましたが、これは異例のご出世でございました。その後も、十三歳で右兵衛佐に昇進されました」

比企尼は、誇らしげだった。

「ところが、その翌年平治の乱が起き、清盛に敗れた義朝さまは戦死。頼朝さまは、清盛の継母の池禅尼の命乞いによって、奇跡的に命が助かり、伊豆の国、蛭が小島に流されてしまいました。そこで、夫の掃部允と相談して、一緒に京を去って、鎌倉に近いこの武蔵国比企郡の実家に戻って、頼朝さまをお助けすることにしたのです。頼朝さまをどんなことがあっても一生お助けすると義朝さまに硬くお約束いたしましたし、それ以上に頼朝さまを心から愛しておりましたから。

夫の掃部允は、こちらに帰って来て遠からず死に、私は出家して尼になりましたが、あらゆる手段で頼朝さまをお助けする決意は弱まるどころかますます強まってきたのです。

そのためには、私の三人の娘にも協力してもらわなくてはなりません。

長女は、安達藤九朗盛長に、お前の母親である次女は、河越の太郎重頼に、三女は、伊豆の伊東祐清に嫁がせた。それというのもすべて頼朝さまを助け

るためだったのじゃ。

安藤盛長は、京の義朝さまの家人であったが、気が利いていて面倒見がよく何を頼んでも気持ちよくこなしてくれた。頼朝さまにお仕えすればきっとお役に立つと考えたのじゃ。

貴女の父、河越重頼は、秩父からでてきて入間川の畔に根拠を構えた有力豪族の嫡男で、隣同士のよしみで子供の頃から噂を聞いていたが、学問と武芸に優れそれでいて性格はおおらかで、だれからも好かれる。また、武士と農民が一体となって農業に励み、毎年穀物や野菜の実りも多く豊かな財政を維持している。だから、頼朝さまを食料面で支えてくれると考えたのじゃ。

それから、頼朝さまが流された蛭が小島の近くで、三女の婿を探したところ、伊豆の国の有力豪族で頼朝さまの目付け役でもある伊東祐親の次男に孝行息子がいると聞いて、祐親殿に頼み込んで嫁に行かせた。この次男というのが祐清だが、この結婚のおかげで、頼朝さまが危うく殺されるのを助けられたことがあった。このいきさつは、後ほど話して進ぜよう。

三人の娘は、私が決めた結婚に何一つ不満をもらさず、思い通りに嫁いでくれた。本当に孝行な娘達で感謝している。三人とも、美しく気立ての良い嫁だったので、婿殿も満足されたのであろうのう、夫婦仲が悪いのは、一組もなかった」

比企尼は、ここで一息つくとも満足そうにお茶をすすった。

郷子は、両親のことを考えた。

「確かに夫婦仲はいい。五人の子供ができて、この一夫多妻が普通の時代に、父親には浮いた噂一つない」

郷子は、さらに思う。

「比企尼には、人を見る目があって、それぞれの娘に最も似合いの婿を選んだに違いない。もし、私を呼んだ理由が嫁入りの話だとしたら、どのような婿をお世話してくれるのだろうか」

郷子は、期待を持って、比企尼の顔を見つめている自分に気がつくにつつましく目を伏せた。

「それで、三人の婿殿に頼朝さまの支援をお願いした。盛長殿には、蛭が小島で頼朝さまにお仕えすること。重頼殿には、月二回食料を届けてもらうこと。祐清殿には、外敵からの保護と物資の支援じゃ。始めた頃は、頼朝さまが独り立ちなされるまで五～六年と考えていたが、それが、まさか二十年も続くとは思わなかった。平家の隆盛がそれだけ続いたということだが、その頃には源氏の再興をほぼ諦めかけていたが、清盛の死で平家がこのように突然もろくも崩れようとは当時は思いも寄らなかった。結局、平家の栄華も清盛という傑出した人物あってこそのものであったことがよく判るわね」

比企尼は、またお茶をすすった。

郷子は、まだ十七歳だった。二十年という経験したこともない時の長さを考え、それだけの期間流人を支え続けた比企尼の乳母という職種を遥かに超えた底知れぬ情愛と忠誠心と鋼鉄のような意志の力に深い感銘を受けざるを得なかった。—このお祖母さまの言う事には、一族の誰も逆らうことは出来ない—  
比企尼の話は、まだ続く。

「その二十年間、頼朝さまは、配所に暮らす身として、毎日、写経や読経に明け暮れ表向き謹慎の意を表されていたが、本当はそれだけではなかった事は、後ほど三善康信殿から話しがあろう。

ところで、先に話した、頼朝さまが危うく殺されそうになった時に祐清に助けられたというのは、こういう話じゃ。

頼朝さまには、貴族の血が流れているせいか、女人との色事の噂が絶えないけれども、私は、それは暇を持て余ましたうえでの火遊びということではなく、頼朝さまに深いお考えがあつてのことだろうと思っていますよ。

三女の娘婿、祐清殿には物心両面から頼朝さまを支えてもらう内に二人はことのほか親密になり、頼朝さまは足繁く伊東家に通うようになりましたが、その間に、頼朝さまが祐清の妹八重と親しくなったのは当然の成り行きでしょう。しかも、伊東家は、伊豆国第一の豪族ですから、その婿に入れば頼朝さまは有力な支援者を得られることになります。そういった思惑が頼朝さまになかったといえは嘘になりましょう。

そして若い二人は、恋仲になり千鶴という男の子まで生まれたのです。ただ、その間三年ほど、八重の父親の伊東祐親は、都の番役に服していて不在だったので、この事実を知らなかったのです。ところが、三年間の番役を終えて帰郷し、この事実を知ると烈火のごとく怒って、千鶴を滝壺の中に捨てたのです。さらに、八重を他の武士に無理やり嫁がせたうえで、頼朝さまを殺そうとしたのです。

しかし、祐清がそれを知って、いち早く内通したので、頼朝さまは配所を危うく逃げだして助かったのです。

伊東祐親は、娘が流人の子を産んだことで平家に咎められ、領地が没収されるのを極度に恐れたのでしよう。

その後、頼朝さまは、伊豆の有力豪族北条家の政子さまと恋に落ちて同棲を始めたのですが、やはり都から帰郷してこの事実を知った父の北条時政殿が大反対して、娘を頼朝さまの所から無理やり館につれて帰りました。しかし、政子さまは、父親の意向に従わず、深夜、豪雨の中を頼朝さまの所に裸足で逃げ戻ったのです。将来になんの展望もない罪人の頼朝さまの下に全てを投げ捨てて身を託した政子さまの一途な愛情の深さに、時政殿はもう反対なされなかつ

たのです。しかし、時が移って頼朝さまが、坂東武者の棟梁になられたいま、時政殿は、娘よ、あの時は良くやったと内心褒めているのではないのでしょうか」

郷子は、父の反対を押し切っても、自分の意志を貫いた政子さまの気の強さと愛情の深さが、頼朝さまをして、恐妻家といわしめる所以なのだろうかと思った。

一私には、とても真似できそうにもないわ。でも、うらやましいお方ー

「一方、頼朝さまを殺そうとした伊東祐親は、頼朝さま挙兵後に平家方につき捕らえられて殺されてしまったのですから、運命というのは判らないものです」

それから、伸びをすると

「すこし草臥れましたね。庭に出て、梅の花でも愛でながら話しましょうか」と言って立ち上がると、庭の方に歩き出した。郷子も、比企尼について、縁側から下に降りて履物をはいた。比企尼は、紅梅の林の中を歩きながら、また話を始めた。

「義朝さまは、鼻のやたらに大きいごつごつした顔に髭を生やし、猪首で、背よりも横幅の方が広いずんぐりした人で、男どもをいつも破れ鐘のような大声で叱り付けていましたが、女子にはそれは優しい方でしたよ。そして、美人にはことのほか目がなくて、美形であればどんな苦労も手間も惜しまずにとあらゆる手段を使って、口説き落としました。でも、初めはそんな不細工な男に口説かれるのを嫌がっていた麗人も、一旦気を許すともう夢中になってしまうのですから、不思議な魅力のある方でした。ところが、義朝さまは、そんな美人にすぐに飽きてしまって、次の美人を探すのですから、罪作りなお人でありました。

そんな義朝さまは、分かっているだけでも、六人の美女の間に、十三人ものお子さんを作られました。九人の男子と四人の女子です。

上の二人の男子は、遊女との間の子で、三人目が頼朝さまでした。先に話したように、頼朝さまの母は、熱田大宮司、貴族の藤原季範の娘で正室とされたから頼朝さまは、源氏の正統な嫡男とされたのです。義朝さまも、頼朝さまだけは、嫡男として特別扱いされていました。私が、そのような大切な嫡男の乳母に選ばれたことは、大変名誉なことだと感激したのも判るでしょう。

木曾義仲討伐の大手の大將軍となった範頼さまは、六番目のお子さんです。母は池田宿の遊女といわれていますが、遠江国蒲御厨の藤原範季に引き取られ育てられました。

同じく搦手の大將軍になった義経さまは、末っ子で九番目の男のお子様。母は、絶世の美女と言われた常盤御前です。近衛天皇の中宮九条院御付きの雑仕

女を採用する際、都の美女千名を集め、それを百名に絞り、さらに十名を選んだが、常盤御前はその中で一番の美女だったというから、その美しさの程が分かるでしょう。たしかに、女の私から見ても、ほれぼれして見とれるほどの妖麗さでしたよ。義朝さまは、そんな美女を口説き落として、それはもう有頂天でした。もう常盤、常盤と朝から晩までのべつ暇なくへばりついて、わたくし達もそばから見ていて恥ずかしくなるような有様でした。常盤御前は、今若、乙若、牛若という三人の男の子を生みましたが、その最後の牛若というのが義経さまです」

比企尼と郷子は、紅梅の林の中にある東屋の床机に腰を下ろした。

「しかし、昔から男の子は、母親似になるし、女の子は、父親に似るというけれど、本当ね。頼朝さまも、範頼さまも、義経さまも義朝さまの美女狂いのおかげで、本当に皆さん美男子になって・・・それで、女の子は気の毒ながら義朝さま似でいらして・・・」

それから、比企の尼は、ちらりと郷子の方を見た。

郷子は、つと紅梅を見上げて、さりげなく気がつかない振りをした。

「河越重頼殿は、義朝さまとは比べものにならないくらい好男子だし、母は私似の美人、あなたは両親の良いところを取って、どこに出しても恥ずかしくない娘ですよ。それに、いまは全くお化粧をしていないようだけど、もっと磨けばずっと綺麗になりますよ。まあ、常盤御前とまではいかないかもしれないけれど。ほほほほ・・・」

比企尼は、めったに言わない冗談をいうと袖で口を隠して笑った。

「さて、長々と話してきたけれど、それというのも、あなたにいま頼朝さまの置かれている状況を理解して欲しかったからなのですよ。これからが本題。

いままで話したとおり、頼朝さまと範頼さまと義経さまは、父親は同じでも母親が違う異母兄弟。しかも、育った環境も全く違うから、兄弟とは言っても一緒に遊んだり、喧嘩したりして培う心情的な絆がないから、突然兄弟と言われても戸惑うことのほうが多い。でも、頼朝さまとしては、いま兄弟が力を合わせて、この難局を乗り切りたいと願っているの。それで、私が呼ばれて相談を受けたわけ。『われわれ三人の兄弟の関係をより強固にするための、新しい絆が欲しい。自分は、あなたを本当の母親だと思っている。だから、あなたのご縁を通じて、われわれ三人の絆を強固なものにしたい。ついては、あなたの孫を範頼と義経の正室に迎えさせたいので、よろしくお願ひしたい』

それを聞いて私は心から嬉しかった。乳母として、頼朝さまが蛭が小島に流されていた間の二十年間ずっと支え続けた苦労は無駄ではなかったと思いました。それで私は、盛長に、娘を範頼の正室にだすよう話したところ、盛長は『願ってもないこと』と大感激だった。この婚約は成立し、もう興入れも済んでいる



のです」

郷子は、胸の鼓動が急に激しくなり、息もつけないくらい苦しくなった。

「まさか、わたしが義経さまの・・・そんなことは有り得るはずがない。

父からも、母からもまだ何の話も聞いていないー

比企尼は、郷子の反応を見るように、そこで話を止めた。

郷子は、頭が真っ白になって何も考えられなかった。

「もう話の内容は判っていよう。そなたは、父からも母からも話を聞いていないと訝っていようが、それは、私から話すからと言ってあったためじゃ。もちろん、そなたの両親からも同意の返事を既に貰っている。この話は、頼朝さまの御意志で決められたことじゃ。有難く受けてもらえるな」

郷子は、弱弱しく答えた。

「ほんとうに私でよろしいのでございますか。義経さまは、なんとおっしゃっているのですか」

「兄弟の絆を固めるための婚礼ぞ。頼朝さまか政子さまから、義経さまに話があるはず。そちが心配することではない」

比企尼はもう話が終わったというように床机から立ち上がると郷子をそこに残したまま東屋から出て行きかけたが、そこで振り返ると言った。

「今日はゆっくりと寝るが良い。明日、三善殿が頼朝さまを頂点とする鎌倉政権における義経さまの正室としての心構えについて話してくれるであろう」

早い夕餉を済ますと、郷子と重方は侍女に寝室に案内された。広い部屋に二つの寝具が用意されていた。姉と弟と同室で寝るように準備されていた。若い女が一人で寝ることへの用心か、あるいは、姉弟で話し合えるよう考えたのか、それとも郷子の見張り役としてつけられたのかよく判らなかった。

郷子は、義経のことを考えようとしたが、顔も容姿も性格も、何一つ具象化出来なかった。ただ、知っていることは、源氏の嫡流である義朝と美女の中の美女と評判の常盤御前との間にできた三番目の男子。平家との一の谷での決戦で、絶壁の鴨越を馬で駆け下りて勝った戦の英雄。そして、いま都でもっとも女性の間で人気の高い若者。

十七歳になるいままで一度として、男に恋文を貰ったことも、言い寄られたこともない私が、その人の正室になる。

自分は、和歌や、楽曲や、舞など都の女性が男を喜ばすような作法は、ほとんど何も嗜まない。お化粧などもしたことがない。ただ、男の子がするような、弓や刀の稽古や乗馬に明け暮れてきた。

母親も、男の子に対しては、教育熱心だったが、女の子には礼儀作法を厳しく躾けた他は自由に遊ばせてくれた。

郷子は、不安に思う一方で、それとは裏腹に心の奥底にほのかに幸せな感情が

わき上がってくるのを感じた。

そして、その幸福感をだれかれなしに伝えたかった。

隣を伺うと重方は、まだ起きているようだった。

「今日は、何をしていたの」

比企尼と郷子が、話をしている間姿が見えなかった重方に訊いた。

「村人が面白いところがあるというので、馬でそこに行ってきた」

重員は、ぼそぼそと重い口を開いた。

「その面白いものってなに」

「百穴といって、岩山に穴が一杯開いているんだ」

「なんの穴かしら」

「昔のお墓らしい」

「それが百もあるの」

「数えたらもっとあるみたいだった。二百ぐらいかな」

「それから何をしたの」

「村に行ったら、井戸の周りで男が女たちに話をしていた」

「あら、どんな話かしら」

「男は丁度都から帰ったところで、都の噂話を女達に聞かせていた」

「都の噂話！」

郷子は、突然興味を引かれて、重方の方に向き直って訊いた。

「なんでも静御前という評判の白拍子が義経さまに惚れて愛人にしてくれと押しかけたそうなの」

「・・・・・・それで義経さまは？」

郷子は、恐る恐る訊いた。

「それが、義経さまも静御前にすっかりのぼせ上っているそうだ」

郷子は、いままでの幸福感はどこかに消し飛んで、心が暗く沈みこんでくるのを感じた。一訊かなければ良かったと後悔したがもう遅かった。

ただ、その後何か訊かれない限り話さない重方の口の重さが有り難かった。

郷子は、自分の意志とは無関係に相思相愛の男女の間を裂くように正室として送り込まれることの不条理と愛のない結婚なるかもしれない失望感で深い悲しみに沈むのだった。

—この話は、お断りしたい—

郷子は、明日、比企尼に話そうと決心した。